

助け合いの諸相と陥穽：特集号の刊行にあたって

メタデータ	言語: ja 出版者: 心理学評論刊行会 公開日: 2021-03-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 剛 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00027896

助け合いの諸相と陥穽

—特集号の刊行にあたって—

橋本 剛

静岡大学

本特集が編集された2020年は、COVID-19パンデミック、いわゆるコロナ禍に世界が見舞われた年として記憶されよう。コロナ禍はあらゆる角度から「助け合いの諸相と陥穽」を顕現化した。未知のウイルスに対する恐怖心を乗り越えて、職務に取り組む医療従事者やエッセンシャルワーカーを称賛する声の陰で、それらの人々やその近親者との関わりを忌避する動きも垣間見られた。運悪く感染した人々を慰め励ます声もあれば、感染者に謝罪を求めるような偏狭な言説も散見された。マスク、体温計、消毒液などが不足するなか、限られた物資を分かち合おうとする人々の一方で、買い占めや転売などで利益を得ようとする人々もいた。経済活動や余暇活動を再び活性化すべく、感染拡大防止に留意しながら可能な範囲で日常を取り戻そうとする人々の一方で、それらの活動に過剰反応して、ときに乱暴な方法で抑制しようとする、いわゆる自粛警察やマスク警察も出没した。

なかには例外もあるにせよ、多くの人々は、自分なりの知識、信念、価値観に基づいて、自分なりの正義を実行したのであろう。しかし、そこで生じた数多の衝突や軋轢は、各々の価値観や正義がしばしば相反すること、かつそれらの妥協点を見いだすのが容易ではないことを示している。そのような社会の様相は、もしかしたらコロナ禍前から存在しており、コロナ禍はそれらを増幅したに過ぎないのかもしれない。真偽不明瞭な情報が氾濫する状況を免罪符として、独善的で視野狭窄的な言説が蔓延り、異論に耳を傾けることを拒否するかのような独断や集団思考が繰り返される。そのような風潮の中で、人々は傷つけ合い、恐れ合い、社会全体が疲弊の色を濃くしていく。

この社会において、果たして心理学に何ができるだろうか。まず挙げられるのは、傷ついた人々の心を癒やすための専門的援助や支援であり、臨

床心理学領域を中心とした公認心理師制度をはじめとする一連の取り組みは、その中核を担うものと言えよう。ここから「助け合いの心理学」とは臨床心理学のこと、というイメージを持つ人々も、少なからずいるのかもしれない。しかし実際のところ、「助け合いの心理学」は、臨床心理学に限らず、あらゆる心理学が共有しうるテーマである。なぜなら、心理学の研究対象である人間の心は、その社会性によって特徴づけられ、その社会性とは、援助、サポート、協力などのあらゆる助け合いを中核とするからである。冒頭に挙げたコロナ禍の諸相や軋轢もまた、人間の種々の助け合いの断片とも考えられる。そして、臨床心理学に限らず、さまざまな心理学の観点から照射することで、助け合いにまつわるあらゆる心理や行動の機序が解き明かされる可能性は格段に広がっていく。

助け合いとは何なのか

ただ、「助け合い」はともすれば金科玉条的に扱われ、あえて懐疑的な視点を向けるようなスタンスが回避されがちなテーマでもある。もちろん、基本的に助け合いは大切であり、推奨されるべきであろう。しかし、なぜ助け合いが必要なのか、なぜ人々は助け合いを美化するのか、なぜ助け合いに対するシニカルな言説は嫌悪されるのか、そもそも助け合いとは何なのか。それらを考えるのもまた心理学の課題であろう。

社会にはさまざまな価値観が複雑に入り組んでいるがゆえに、あらゆる助け合いにも、さまざまなトレードオフが内包されている。孫の無遠慮な甘えに笑顔で応じ続ける祖父母は、中長期的には自己制御や忍耐力の育成を阻害しているのかもしれない。愛飲家の酒宴は同好の士ならではの心地よさをもたらす一方で、感染症のリスクを高め、

生活習慣病などによる中長期的な健康リスクにも繋がりがかねない。オンラインによる相談体制の拡充は、身近な対人関係での気遣いや配慮の弱体化に拍車をかけるかもしれない。身内の利得確保を優先する相互扶助的な取引は、余所者を搾取することで既得権益者の利権を不当に増大するしくみを内包しているかもしれない。人々の繋がりを促進するはずの情報技術は、結果的に憎悪のコミュニケーションをも増幅・加速させているのかもしれない。

助け合いとは、人々がお互いに、他者がより好ましい状態となるように働きかけることであろう。よってそこには、誰の何をもって「好ましい」とするのか、何らかの価値基準や価値判断が存在する。しかし、「助け合い」「支え合い」という言葉には、それだけで大義名分、絶対的正義のような響きがあるがゆえに、その背後に潜在している価値観がその他の価値観より優先されるべきなのか、所与の価値観を優先することが他の価値観を脅かすことにならないのか、といった懐疑的な観点を含めた「やばな」議論は敬遠されがちな側面もある。また、所与の価値観に別の価値観を脅かすような副作用があると気づいても、自身の正義を守るために、それらを看過・隠匿してしまうこともある。独善的な正義や助け合いを振りかざし合うことによる軋轢が随所にみられる現代社会の様相は、そのような風潮の蓄積によるところも小さくないのではないだろうか。

そこで必要なのは、さまざまな文脈における助け合いの客観視と相対化、そして自省と自己懐疑であろう。あらゆる助け合いの背景に、どのような価値観や駆動要因があるのかを明確にするとともに、それらの助け合いの波及効果を広く深くとらえることを通じて、それぞれの重要性のみならず、その「陥穽」、すなわち問題点や副作用についてまで理解を深めることは、社会のバランスを柔軟かつ適正に保つような助け合いのあり方を模索するために必要不可欠であろう。さまざまな助け合いのニーズが顕現化しつつも、実際にはそのしくみが機能不全に陥り、思わぬ副作用を生み出すことも多い現代社会だからこそ、あえて助け合いの諸相とその陥穽について論じることが求められるのではないだろうか。

本企画のもうひとつの趣旨

幸いなことに心理学は、その歴史を通じて育まれた学問的土壌によって、助け合いも含めた人間の社会性を、あらゆる観点から論じうる学問である。しかし、その学問的土壌が、今後もさらに引き継がれていくかについては、懐疑的な見解も否定できない。日本における科学研究をとりまく状況の厳しさに加えて、「すぐに、わかりやすく、役に立つ」ような臨床実践の重視傾向には、それ以外の研究領域や教育へのリソースを枯渇させるような圧迫や制約をもたらしているという副作用もある。

そんな圧迫や制約など無縁の如く、世界の最先端で活躍している研究者が一定数いるのも事実であり、それらの研究の意義や重要性は言うまでもない。しかし、インパクトファクターなどとセットで論じられるような最先端の研究は、心理学教育の裾野を担う多数の教員、さらにそこで心理学を学ぶ初学者の学部生や大学院生にとって、理解しがたい遠い別の世界のことのように思われることもある。極論すれば、心理学では現在、最先端志向と臨床実践主義の二極化傾向が進んでおり、この状況は「最先端でも臨床実践でもないが、自分なりのスタンスで人間心理を探求したい」という層の研究活動を、困難化しているようにも思われる。この傾向は、そのような人々の活躍が期待されるはずの国内学会活動などの地盤沈下を経て、やがて学問全体の衰退という負の連鎖を招くかもしれない。

最前線に立たずとも、臨床実践に携わらずとも、人間心理に興味関心を持つものであれば、多かれ少なかれ助け合いを意識することもあるだろう。そこで心理学が応えうる貢献可能性は豊富である。すなわち、助け合いの心理学は、臨床心理学に限らずともあらゆる展開可能性があり、その探求は個々のニーズに応じて手の届くものであり、かつ人間や社会を理解する上で興味深いものである。このようなメッセージの発信が、本企画のもう一つの趣旨である。

そこで本特集では、さまざまな心理学における助け合い研究の可能性を示すべく、多様な領域から助け合いをテーマとした論考をご寄稿頂いた。本特集の構成順に紹介すると、まず助け合いを司

る心理的メカニズムとして、感情（山本・樋口論文）、アタッチメント（古村・戸田論文）、社会神経科学（上田論文）はいずれも、その中核となりうる観点であろう。また、それらの心理的メカニズムが培われた人類の歩みを論じる上で、進化心理学（小田論文）と文化心理学（新谷論文）は欠くべからざる両輪と言えよう。さらに、助け合う心理を理解するためには、助け合いの輪に入れない孤独感（五十嵐論文）、利他より利己を優先する Dark Triad（下司・小塩論文）といった、助け合わない、助け合えない心理の理解もまた重要であろう。そして、産業・組織心理学におけるチームワーク（山口論文）、教育心理学における学業的援助要請（中谷・岡田論文）、臨床心理学における援助要請（永井論文）といった、応用実践的領域における助け合いの論考からも、その多面性や陥穽が窺い知れよう。さらに、各原著論文に対するコメント論文もまた、領域を超えた助け合い研究のさらなる展開可能性を、大いに刺激するものである。

先述の企画主旨を踏まえて、原著論文の執筆者には、各自の専門的見地から、陥穽や副作用も含めて助け合いについて論じるという主目的に加えて、当該領域の初学者にとっての導入編ともなり得るものを、という副次的目的もあわせて依頼させて頂いた。それらの論考をさらに発展させる役割を担ったコメント論文執筆者も含めて、何かと無理の多い依頼であったにも関わらず、ご快諾頂いた執筆者の皆様には、ただ感謝するばかりである。

本特集の刊行における 助け合いの諸相と陥穽

本特集「助け合いの諸相と陥穽」は、研究者から実践家まで、初学者からベテランまで、心理学に携わるあらゆる人々に、助け合いが心理学全般に通じる根幹的なテーマであること、同時にそこには多様なアプローチの可能性があること、さらに助け合いを考える際にはさまざまな陥穽も無視

できないことを示すことで、助け合いを基軸とした心理学研究を全般的に活性化するというコンセプトのもとに企画されたものである。

ただ、助け合いは心理学の中核的テーマのひとつであろうにもかかわらず、本誌（心理学評論）において、助け合いを正面切ってテーマとした特集は意外と少ないようである。あえて言えば「心理療法とカウンセリング」（2巻2号）、「愛」（33巻3号）、「共感性の進化と発達」（58巻3号）などは、実質的に助け合い（もしくはそれに類するもの）を主題としていると見なせるかもしれないが、助け合いそのものをテーマと銘打った特集はほぼ皆無と言えよう。その理由は定かでないが、そもそも助け合いにまつわる心理学はあまりにも膨大であり、一特集として企画すること自体に無理があったのかもしれない。

それもあってか本特集は、原著論文10編、コメント論文9編と思わぬ大部となり、急遽63巻の3号と4号に分冊されることとなった。蒼々たる執筆陣によるこのような企画が実現できたのは、ゲストエディターである相馬敏彦氏と永井智氏の献身に負うところが大きい。もし本特集に見るべきところがあるならば、それは執筆者およびゲストエディターの熱意と尽力によるものである。もし至らぬ点があるならば、それはひとえに橋本の責任であり、伏してお詫びするばかりである。

本特集は一見タイムリーにも見えるが、コロナ禍の予兆もなかった2019年秋に立案されたものである。それでもすでに十分タイトなスケジュールであったところに、思わぬコロナ禍による混乱もあり、この企画自体が、執筆者とゲストエディターの皆様を助け合いの陥穽に嵌めてしまったのではないかと、責任編集者として自責の念も禁じ得ない。せめて、陥穽の闇の深さが星空の輝きを際立たせるように、苦境の中で執筆された本特集の各論文の煌めきが、より多くの読者に、少しでも伝わることを願っている。

— 2021.1.12 受理 —